

明恵撰『摧邪輪』卷中 訓・註 試稿(六)

米澤 実江子

承前(『佛教大学 法然仏教学研究センター紀要』第一・二・三・四・五)

キーワード

明恵・『摧邪輪』・訓読文・註記

【報告範囲】

「三三丁表九行目より四一丁裏三行」までを挙げ「試稿」とした。

【凡例】

- 一、底本は、佛教大学附属図書館蔵「寛永年間版(準貴重書 G極楽寺/377)」とし、始めに書き下し該当箇所を翻刻し、次に書き下しとその註記(通し番号)を挙げた。
- 一、翻刻にあたっては、底本の字体を残した。書き下しに際して、通行の字体に改めた。

- 一、翻刻部、【】の内、丁数とオ(ウ)を示す場合は、底本の丁数とその表(裏)を指し、漢数字と上(下)を示す場合は『鎌倉旧仏教』翻刻部の頁とその上(下)を指す。

一、〽は原割り注。

- 一、訓読文において、返点・送り仮名は、原則底本に従ったが、送り仮名は適宜補った。

- 一、訓読文において、典籍引用部は改行して二文字下げた。また引用末の「〽云々(云云)」は、「〽」と云々(云云)とした。

一、訓読文において、明恵の設問とその答え・他は、適宜改行した。

一、註記における引用出典の略称は以下の通りである。

『昭法全』(『昭和新修法然上人全集』)

『浄全』(『浄土宗全書』)

『大正蔵』(『大正新脩大蔵経』)

『望仏』(『望月佛教大辞典』増訂版)

『中仏』(中村元著『広説佛教語大辞典』)

『織田仏』（織田得能著 『織田佛敎大辞典』）

『大漢和』（諸橋轍次著 『大漢和辞典』）

『日国』（『日本国語大辞典』 第二版）

『漢和大辞典』（藤堂明保編 『学研 漢和大辞典』）

〔付記〕

当研究班研究課題の底本として、佛敎大学附属図書館所蔵本を使用させて頂きました。佛敎大学附属図書館のご厚情に感謝申し上げます。

《翻刻》【三三丁表九行】【三五四頁上】

問曰。依善導意、以十三定観爲定善。是即可爲禪門。以稱名行攝散善中。何云爲禪門行乎。【三三丁ウ】答。如前會釋。下輩臨終、不可發根本定心。唯假稱名功得滅罪往生。以此攝散善也。

《訓》

問ひて曰はく。善導の意によるに、十三定観を以て定善とす。是れ即ち禪門とすべし。稱名の行を以ては散善の中に撰す。何ぞ「禪門の行とす」と云ふや。

答ふ。前に会釈するがごとし。下輩の臨終、根本定心を発すべからず。唯だ稱名の功のみを仮りて滅罪往生を得。これを以て散善に撰するなり。

註

(1) 善導 『観経疏』、『大正蔵』三七、二七七頁下。

《翻刻》

此人兼聞大乘十二部經首題名字。如下観経下品上生説。善導於此不設專修要行。當知。止餘行稱名爲先者、約一期久習人、摠示如法念佛儀也。設雖不發三昧、無間相續必爲令成就念心也。

《訓》

この人は、兼ねて大乘十二部經の首題の名字をも聞く。『観経』の下品上生に説くがごとし。善導、ここにおいては、專修の要行を設けず。当に知るべし。余行を止めて稱名を先とするは、一期久習の人に約して、惣じて「如法念仏の行儀」を示すなり。設ひ三昧を發せずとも、無間相續して、必ず念心を成就せしめんが爲なり。

註

(2) 『観無量寿経』、『大正蔵』十二、三四五頁下。

《翻刻》

如観経疏第三示地観方法云。即向静處面向西方正坐跏趺一同前法。既住心已、徐徐轉【三五四頁下】心想彼寶地雜色分明初

想、不_レ得_三乱_一想_{スルヲ}。多_ク境_ヲ。即_チ難_レ得_レ定_ヲ。唯_ニ觀_ニ方_寸一_尺等_ヲ。或_ハ一日_二三日、或_ハ四_五六_七日、或_ハ一月_二一年_三二年_三三年_等、無_ク間_ニ日_夜、行_住坐_卧【三四丁オ】身_口意_業常_與定_合。唯_ニ萬_事俱_捨由_如失_音聲_音癡_人者_ハ、此_定必_即易_レ得_レ。若_シ不_レ如_是、二_業隨_緣轉_定想_逐波_飛。縱_盡千_年壽_ヲ、法_眼未_曾開_一〔云云〕。示_別定_{方法}如_レ此_ノ。

《訓》

『觀經の疏』の第三に「地觀」の方法を示して云ふがごとし。

即ち静処に向ひて、面を西方に向けて、正しく坐し跏趺して、一_もら前の法に同ぜよ。既に心を住め已りて、徐徐として心を転じて、彼の宝地雑色分明なるを想へ。初めに想ふには、多境を乱想することを得ざれ。即ち定を得難からん。唯だ方寸一尺等を觀ぜよ。

或いは一日二日三日、或いは四五六七日、或いは一月一年、二三年等、日夜を問ふこと無く、行住坐臥に、身口意業、常に定と合せよ。唯だ万事俱に捨てて、由し、失音・聲音・癡人のごとくならば、この定、必ず即ち得易からん。もし、是くのごとくならずんば、三業、縁に随ひて転じて、定想、波を逐て飛ぶ。縦ひ千年の寿を尽すとも、法眼、未だ曾て開けじ、と〔云云〕。別定の方法を示すことかくのごとし。

註

(3) 善導『觀經疏』、『大正藏』三七、二六六頁中。

《翻刻》

稱名是念佛三昧_ノ摠方便也。准_ニ修_定方法_ニ示_稱名_軌儀_ヲ。其_本意_ハ、專_ラ在_四于_今堅_住心_念。設_雖不_レ迄_發三_昧、必_望一_境心_也。凡_不限_善導_諸示_禪門_軌則_必令_止餘_緣住_一境_上。

《訓》

稱名は、是れ「念仏三昧の惣方便」なり。修定の方法に准じて、稱名の軌儀を示す。其の本意は、専ら心念を堅住せしむるに在り。設ひ三昧を發するに迄ばすと雖も、必ず專注一境の心を望むなり。

凡そ善導に限らず、もろもろの禪門の軌則を示すには、必ず余縁を止め、一境に住せしむ。

《翻刻》

如_{天台止觀}第四_釋修_禪五_緣、解_{第四息諸緣}務_{中云}緣_務有_四、一_{生活}、二_{人事}、三_{技能}、四_{者學問}〔乃至〕四_{學問者}、讀_誦經_論、問_答勝_負等_是也。領_持記_憶心_勞志_倦。言_論往_復水_濁珠_昏。何_暇更_得【三四丁ウ】修_止觀_耶。此_事尚_捨。况_前三_務〔云云〕。

《訓》

天台『止觀』の第四に、「修禪の五縁を釈す」として、第四の「息諸縁務」を解する中に云ふがごとし。

縁務に四有り。一は生活・二は人事・三は技能・四は學問。〔乃至〕四の學問とは、經論を誦誦し、問答勝負する等、是れなり。

領持記憶して、心勞れ、志し倦む。言論往復して水濁り、珠昏し。

何の暇ありてか、更に止観を修することを得んや。この事尚し捨つ。況や前の三務をや、と（云云）。

註

(4) 智顛『摩訶止観』「第四」、『大正蔵』四六、四二頁下〜四三頁上。

《翻刻》

如（マ）求那跋摩遺文云。放捨餘聞思、依止林樹間。是夜、專精進、正觀常不忘、境界恒在。猶如對明鏡。如彼我亦然。由是心寂靜（云云）。如此非一。示修禪軌則、令下止餘緣攝心於一境。聞思學問等亦在所捨中。善導解釋、以准此可知。

《訓》

求那跋摩の『遺文』に云ふがごとし。

余の聞思を放捨して林樹間に依止す。是の夜、専ら精進して、正観常に忘れず、境界恒に前に在り。猶し明鏡に対するがごとし。かのごとく、我れもまたしかり。是れによりて、心寂靜なり、と（云云）。

かくのごとく一に非ず。「修禪の軌則」を示すには、余縁を止め、心を一境に撰せしむ。聞思學問等もまた所捨の中に在り。善導の解釈、以てこれに准じて知るべし。

註

(5) 梁慧皎編『高僧伝』、『大正蔵』五〇、三四一頁下。

《翻刻》

若如善導解釋、以口称三昧爲行之人、必以堅固寂靜心可爲本。其靜心法、先須離不善境界。次可止生活乃至學文等緣務。若止息緣務得一心不乱、口称與心念和合、往生淨土行、得決定以此一心念佛善導爲決定往生業。

《訓》

もし、善導の解釈のごとくならば、「口称三昧を以て行とせんの人」は、必ず堅固寂靜の心を以て本とすべし。その「靜心の法」は、先づ須らく「不善境界」を離るべし。次に「生活」乃至「學文」等の縁務を止むべし。

もし、縁務を止息し一心不乱を得て、口称と心念と和合しぬれば、往生淨土の行、決定することを得。この「一心念仏」を以て、善導、「決定往生の業」とす。

《翻刻》

若如善導解釋【三五五頁上】者、往生速疾行、良称【三五丁才】名一行、爲可足。例如下彼證真之念慧名陀羅尼門、即惣持無量功德也。此亦如是。雖未證真、称名位、必或有淨觀、或有淨念。依

此義故、立專念名。若得一心專念位、可含藏無盡佛法於一念。更以下非一心專念餘雜善比、按之、豈得爲一類乎。百即百生千即千生義、更不待言。此約如法修行念佛者說也。然如法修行、二門俱難有之。

《訓》

もし、善導の解釈のごとくならば、「往生速疾の行」、良に称名の一行、足りぬべしとす。例せば、かの「証真の念慧」を「陀羅尼門」と名づけて、即ち、無量の功德を惣持するがときなり。これもまた是くのごとし。未だ真を証せずと雖も、称名の位に、必ず、或いは淨觀あり。或いは淨念あり。この義によるが故に、專念の名を立つ。もし、一心專念を得ん位には、無尽仏法を一念に含藏すべし。更に一心專念に非ざる余の雜善を以てこれを比校せんに、豈に一類とすることを得んや。「百即百生・千即千生」の義、更に言を待たず。これは「如法修行の念佛者」に約して説くなり。しかるに、如法の修行は、二門俱にこれあり難し。

註

(6) 善導善導『往生礼讚』「十即十生百即百生」、『大正藏』四七、四三九頁中。

《翻刻》

若自有之者、設雖爲聖道門行者、可云百即百生等。何者、善導

於雜行判、千希得五三等者、意云。末代行者多分入雜行門人、如說修行、難有之。或恃慧業、或眩咒驗。求名利、增貪。若無此邪求、三五丁ウ過人、千人中希有三五。此人必可得往生。非謂千人如說雜行人中三五得往生。其三五往生人、是如說行人、其餘皆有邪求過人也。

《訓》

もし、自らこれあらば、設ひ聖道門の行者たりと雖も、「百即百生」と言ふべし。何とならば、善導、雜行において「千希得五三」等と判じたまふは、意の云はく。

末代の行者、多分、雜行門に入る人は、如說修行、これあり難し。或いは慧業を恃み、或いは咒驗を眩らふ。名利を求め貪瞋を増す。もし、この邪求の過無き人は、千人の中に希に三・五あり。この人は必ず往生を得べし。

「千人の如說雜行人の中に、三・五往生を得」と謂ふとは非ず。その三・五往生の人は、是れ如說の行人、その余は皆、邪求の過ある人なり。

註

(7) 善導『往生礼讚』、『大正藏』四七、四三九頁中。

《翻刻》

或云千中無一者、皆約不法人說也。然念佛行人、皆必樂極樂往生。

若樂^シ往生^フ人^ハ、必^ス厭^ミ離^ス現^ノ世^ノ名利^等。不^レ染^ニ名^ニ利^ニ故^ニ、念^佛心^{増進}。如^法行[、]是^得立^{。如}法^行立^{。故}百^即百^生也^{。入}雜^行門^人、或^少兒[、]若^僧等[、]其^種類^多之^{。未}必^以如^法淨^心爲^先。是^故難^期出^離也^{（爲言）}。

《訓》

或いは「千中無一」と云ふは、皆な不法の人に約して説くなり。しかるに、念仏の行人は、皆必ず極樂往生を樂ふ。もし往生を樂ふ人は、必ず現世の名利等を厭離す。名利に染ぜざるが故に、念仏の心増進す。「如法の行」、是ここに立することを得。「如法の行」、立するが故に「百即百生」なり。雜行門に入る人は、或いは小兒、もしくは僧等、その種類、これ多し。未だ必ずしも「如法淨心」を以て先とせず。是の故に出離を期し難きなり（言はんとす）。

註

(8) 善導『往生礼讚』、『大正藏』四七、四三九頁下。

《翻刻》

若云^レ不^レ爾^者、無^レ有^ニ是^處。謂^ク就^ニ雜^行如^說行^人、且^約華^嚴宗^者、極樂等九佛刹者、是界外解行處也。一乘見聞人、解行善根純熟位、於界【三六丁才】内、尚得十眼十耳德、到離垢定前。是人、生極樂等九佛刹一名界外解行生。生第十賢首佛刹一名證果海生。此約界内通見聞解行、出世唯解行之人上説也。或有下界内唯見聞、【三五五頁

下】出世唯解行、出出世唯證入之人。受持華嚴、往生淨土之人、攝此中^ニ也。

《訓》

もし「しからず」と云はば、是の処^{ことわ}りあること無けん。謂はく。「雜行如説の行人」に就くに、且らく華嚴宗に約せば、極樂等の九佛刹は、是れ「界外解行処」なり。一乘見聞の人、「解行の善根、純熟する位」に、界内において、尚し十眼・十耳の徳を得て、離垢定前に到る。是の人、極樂等の九佛刹に生ずるを「界外解行の生」と名づく。第十の賢首仏刹に生ずるを「証果海の生」と名づく。これ、界内は「見聞」・「解行」に通じ、出世は唯だ「解行」なるの人のみに約して説くなり。或いは、「界内唯見聞」・「出世唯解行」・「出出世唯証入」の人あり。華嚴^⑩を受持して淨土に往生せん人は、この中に撰するなり。

註

(9) 【参考】法藏『五教章』、「二約報明位相但有三一成見聞位（中略）二成解行位（中略）三証果海位謂如弥勒告善財言我当来成正覺時汝当見我」、『大正藏』四五、四八九頁下。

(10) 【参考】法藏『五教章』、「若界内見聞出世得出世証成或界内通見聞解行出世唯解行出出世唯証入此等屬別教一乘此如華嚴説」、『大正藏』四五、四八〇頁。

《翻刻》

貞元華嚴經第四十明三持者五果一中說淨土果云。唯此願王、不_二相捨_一離、於一切時引_レ導其前。一刹那中即得_レ往_レ生_二極樂世界等_一云云。至心讀誦人百即百生千即千生。若不_レ生者、即爲不如_レ法行人。若云千人如說行人千人不生者、一人亦不可_レ生。何以故。一人得_レ生如說。故爲_レ生。若以如說【三六丁ウ】行爲_レ因者、千人亦可_レ生。若雖如說、千人不生者、雖_レ爲_レ如說、一人亦不可_レ生也。若如此云者、即是撥_レ無_レ因果_二大邪見也。称名往生亦准_レ此_レ可知。

《訓》

『貞元華嚴經』の第四十に、「持者の五果」を明す中に「淨土果」を説きて云はく。

唯だこの願王のみ、相ひ捨離せずして、一切の時に於いて其の前に引導す。一刹那の中に、即ち極樂世界に往生することを得ん、等（云云）。

至心読誦の人は、「百即百生」・「千即千生」。

もし、生ぜざらん者は、即ち「不如法の行人」とす。

もし、「千人如説の行人、千人生ぜず」と云はば、一人もまた生ずべからず。何を以ての故に。一人、生を得るは、如説なるが故に生ずとす。

もし、「如説の行」を以て「因」とせば、千人もまた生ずべし。

もし、如説なりと雖も、千人生ぜずんば、如説とすと雖も、一人もまた生ずべからざるなり。

もし、かくのごとく云はば、即ち是れ因果を撥無する大邪見なり。

「称名往生」もまた、これに准じて知るべし。

註

- (11) 『貞元華嚴經』、唐般若訳、四〇卷『華嚴經』。
(12) 四〇卷『華嚴經』、『大正蔵』十、八四六頁下。

《翻刻》

言百即百生等_二者、約如法深心行人_一説也。然舉_レ世營_二眼前之利_一。人皆纏_レ世路之纏_二。汝雖_レ制_レ難行_一勸_レ純_レ念_二念_一心、若不_レ純利_レ者、恐無_二百即百生憑_レ歟。若爾者、非_レ唯限_レ念佛_一一行。設雖_レ爲_レ法華讀誦、雖_レ爲_レ真言修行、若勸_レ一行者、未_レ知_レ機縁_レ生熟。若許_レ自所_レ好者、自可_レ遇_レ於有縁_レ妙行。若然者、是有縁_レ故、修_レ心自明利。若望_レ往生_二者、是可_レ爲_レ千中五_レ三類。或於此中_レ可有_レ經_二恒河沙大劫_一、如_二三三諸佛_一修行_二大_二三七丁才_一菩薩_上也。

《訓》

「百即百生」等と言ふは、「如法深心の行人」に約して説くなり。

しかるに、世を挙げて眼前の利を営む。人、皆世路の纏に纏られたり。汝、難行を制して純念を勧むと雖も、念心、もし、純利ならずんば、恐らくは「百即百生」の憑_二無_一からんか。もししからば、唯だ念仏の一行のみに限るに非ず。

設ひ『法華』の読誦たりと雖も、真言の修行たりと雖も、もし、一行を勧めば、未だ機縁の生熟を知らず。

もし、自らの好む所を許さば、自ら有縁の妙行に遇ふべし。

もししからば、是れ有縁なるが故に、修心、自ら明利ならん。

もし、往生を望まば、是れ「千中五三」の類たるべし。
或いは、この中において、恒河沙大劫を経て三世諸仏のごとく修行
する大菩薩もあるべし。

註

(13) 善導『往生礼讃』、『大正蔵』四七、四三九頁中。

《翻刻》

是故、善導設如法念佛軌儀云百即百生等。輕不如法雜行云千
得五三、云千中無一等也。若於雜行許如說者、如前說。可レ云
百即百生等。置此而不論也。是故、善導出千得五三等所由云。
貪瞋諸見煩惱來間斷故、無有慚愧懺悔心故、等。

《訓》

是の故に、善導は「如法念仏の軌儀」を設けて「百即百生」等と云
ふ。「不如の法雜行」を輕めて「千得五三」と云ひ、「千中無一」等と
云ふ。

もし、雜行において如説を許さば、前に説くがごとし。「百即百生」
等と云ふべし。これを置きて論ぜざるなり。

是の故に、善導「千得五三」等の所由を出して云はく。

貪瞋諸見煩惱、来たりて間斷するが故に。慚愧・懺悔の心、ある
こと無きが故に。

等と云へり。

註

- (14) 法然『選択本願念仏集』「千時希得五三」、『昭法全』三一六頁。
- (15) 善導『往生礼讃』、『大正蔵』四七、四三九頁下。
- (16) 善導『往生礼讃』、『大正蔵』四七、四三九頁中。

《翻刻》

專修、若有此過者、當如雜行人。若同不如法者、汝止有緣餘
行有何益乎。非唯無益、倍滅當根佛法。此過如諸經論說。
不違具出。然【三五六頁上】汝等、惡聖道己心癖。猶如對
敵人。修念佛念心是疎。宛似數隣寶。於此一類、既捨雜
行未入專修。一行全無。准彼瑜伽論所説、可名最極無者矣。

《訓》

專修、もし、この過あらば、当に雜行人のごとくなるべし。

もし、同じく如法ならずんば、汝、有縁の余行を止めて、何の益か
あるや。唯だ益無きのみに非ず。倍、当根の仏法を滅す。この過は、
諸經論に説くがごとし。具さに出すに違あらず。しかるに汝等、聖道

を悪むことは己心の癖なり。猶し、敵人に對せるがごとし。
念仏を修するには、念心、是れ疎かなり。宛も隣の宝を数ふるに

似たり。此の分類においては、既に雜行をば捨てて、未だ專修には

入らず。二行全く無し。かの『瑜伽論』の所説に准ずれば、「最極無
者」と名づくべし。

註
(17) 玄奘訳『瑜伽師地論』、『大正藏』三〇、四八八頁下。

《翻刻》

問【三七丁ウ】曰。汝、若依善導意爲成念心堅固行者、許止學文等緣務者、我、欲勸人從生年七八歲一向教稱名行、不令好學文等業。此条如何。

答。病患巨多方藥非一。根機萬差。教門多種。或愚鈍不足聞思等。或雖非愚鈍、天性好一行。對如此類可勸進稱名一行。不可必勸餘行。不然唯授一行、設雖授、其心不必相應。釋尊十弟子、十種根行各別。授十法化導之。十人尚不守一行。況一切有情乎。

《訓》

問ひて曰はく。汝、もし、善導の意によりて、念心堅固の行を成ぜんが爲には、學文等の緣務を止むと許さば、我れ、人を勧めて、生年七八歳より一向に稱名の行を教へて、學文等の業を好ましめざらんと欲す。この条いかなぞ。

答ふ。病患巨多なれば、方藥一に非ず。根機万差なれば、教門多種なり。

或いは愚鈍にして聞思等に足らず。
或いは愚鈍に非ずと雖も、天性、一行を好まん。
かくのごとくの類に對して、稱名の一行を勸進すべし。必ずしも、

余行を勧むべからず。

しからざらんに、唯だ一行のみを授けば、設ひ授くと雖も、その心、必ずしも相應せじ。

積尊の十弟子、十種の根行各別なり。十法を授けて之れを化導したまふ⁽¹⁸⁾。十人、尚し一行を守らず。況や一切有情をや。

註

(18) 「積尊十弟子十種根行各別授十法化導之」、【参考】①舍利弗(『法華經』「譬喻品」で華光如來の記別を受ける。上根の聲聞)・②摩訶迦葉(『法華經』「授記品」で光明如來の記別を受ける。中根の四大聲聞の一人)・③阿難陀(『法華經』「授學無學人記品」で山海慧自在通王如來の記別を受ける)・④須菩提(『法華經』「授記品」で名相如來の記別を受ける)・⑤富樓那(『法華經』「五百弟子受記品」で法明如來の記別を受ける)・⑥目連(『法華經』「授記品」で多摩羅跋梅檀香如來の記別を受ける。中根の四大聲聞の一人)・⑦迦旃延(『法華經』「授記品」で閻浮那提金光如來の記別を受ける。中根の四大聲聞の一人)・⑧阿那律(『法華經』「五百弟子受記品」で普明如來の記別を受ける)・⑨優波離・⑩羅睺羅(『法華經』「授學無學人記品」で蹈七宝華如來の記別を受ける)。

《翻刻》

若其藥病不相府、得道難期。如下彼目連尊者二人弟子因緣。但如上所出善導解釋并止觀釋等者、善導約一類機、止觀等示修念位方法。【三八丁オ】未防修念前後慧學。慧學者遍萬行為其主。

若不^シ知^ラ其^ノ方^ヲ法^ヲ者、萬^ノ行^ノ難^シ成^ス。是^ノ故^ニ文^殊般^若明^ニ一^行三^昧、先^ツ令^ム學^セ般^若。善^ノ導^ク云^ク。若^シ欲^ハ學^レ解^ト、從^リ凡^至聖^ニ一^切無^レ導^リ。乃^チ至^リ佛^果、皆^ト得^ル學^也。

《訓》

もし、其の業と病と相ひ府はざれば、得道期し難し。かの目連尊者、二人の弟子の因縁のごとし。

ただし、上に出す所の善導の解釈、並びに『止観』の釈等のごときは、善導は一類の機に約し、『止観』等は修念の位の方法を示す。未だ「修念の前後の慧学」を防がず。

「慧学」とは、万行に遍じてその主たり。もし、その方法を知らずんば、万行成し難からん。是の故に『文殊般若』に「一行三昧」を明かすに、先づ般若を学せしむ。善導の云はく。

もし、解を学せんと欲はば、凡より聖に至り一切碍り無し。乃至仏果まで、学することを得よ。

と云へり。

註

- (19) 「彼目連尊者二人弟子因縁」【参考】『雜譬喻經』、『大正藏』四、五二五頁中、五三一頁上。
- (20) 善導『觀經疏』、『大正藏』三七、二六六頁中（『摧邪輪』卷中、三三丁ウ）。
- (21) 智顛『摩訶止観』、『大正藏』四六、四二頁下〜四三頁上（『摧邪輪』卷中、三四丁オ）。
- (22) 『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經』、『大正藏』八、七三二頁上〜。

(23) 善導『觀經疏』、『大正藏』三七、二七二頁下。

《翻刻》

良^ニ以^テ、若^シ無^レ所^ニ知^ハ解^ス、依^テ何^ニ修^ス道^ヲ。若^シ不^レ修^セ行^ハ、慧^ノ學^亦無^ク用^ス。解^行必^ズ具^ス足^リ有^レ所^ニ成^ス一^辨。但^シ如^ク越^ル乎^ニ世^ノ路^ヲ之^際、纔^ニ稱^フ佛^ノ号^ヲ、倦^ニ於^テ習^フ學^ニ之^輩、直^ニ修^ス一^行者^ハ、若^シ有^レ誠^心者^ハ、雖^モ未^ダ可^ク必^ズ爲^ス過^失。若^シ復^テ有^レ一^類念^佛者^ハ、爲^ス翻^ニ無^始癡^心、有^レ學^ニ性^相者^ハ、非^ニ唯^ニ不^レ於^テ專^修爲^ス障^ト、反^相成^ス念^佛行^也。是^ノ故^ニ說^ク稱^名之^經文^ヲ、先^ツ勸^ム慧^ノ學^ヲ、立^ツ專^修【三五六頁下】之^善導[、]既^ニ許^セ學^ヲ解^ト。良^ニ有^レ所^ニ由^ル乎^{。若^シ不^レ然^者、善^ノ導^和【三八丁ウ】尚^等、若^シ無^レ慧^ノ解[、]豈^ニ達^ス一^行發^ス三^昧耶[。]}

《訓》

良におもんみれば、もし、知解する所無くんば、何によりてか道を修せん。

もし、修行せずんば、「慧学」もまた用無からん。

修行必ず具足して成弁する所あり。ただし、世路を越ゆるの際に、纔に仏号を称し、習学に倦きの輩、直ちに一行を修せんがごときは、もし、誠心あらば、未だ必ずしも過失とすべからずと雖も、もし、また一類の念仏者ありて、無始の癡心を翻せんが為に、性相を学することあらば、唯だ專修において障碍とならざるのみに非ず。反りて念仏の行を相成するなり。

是の故に、称名を説くの経文、先づ「慧学」を勧め、專修を立つる

の善導、既に学解を許せり。良に所以あるをや。

もししからずんば、善導和尚等、もし、慧解無くんば、豈に一行を達し、三昧を發せんや。

《翻刻》

問曰。不法過實可避之。我、勸如法念佛行、令諸人皆廢餘行者、汝、何不許之乎。如何。

答。設如於日本國、有幾爾衆生、多分皆契合稱名根機。若二三人不相當其機者、押而勸進之者、於汝可爲過。況二十人以上乎。

《訓》

問ひて曰はく。不法の過は、実にこれを避くるべし。我れ、如法念佛の行を勸めて、諸人をして、皆余行を廢せしめば、汝、何ぞこれを許さざらんや。いかん。

答ふ。設ひ日本国において幾爾の衆生あり、多分は皆称名の根機に契合せん。

もし、二・三人、その機に相ひ当らざらんがときは、押してこれを勸進せば、汝において過とすべし。況や、十・二十人以上をや。

《翻刻》

是故、設雖授如説行、若守一門者、有藥病乖角失。若然者、唯可

待^ツ有縁諸行。不然者、順次出離難期。若又同見^ニ結縁益者、積功運勞善、以爲重。如^シ菩薩所^レ修^ル萬行等。何必^ニ易^ニ行^ヲ道爲^レ勝乎。

《訓》

是の故に、設ひ如説の行を授くと雖も、もし、一門を守らば、藥病乖角の失あらん。

もししからば、唯だ有縁の諸行を待つべし。しからずんば、順次の出離、期し難し。

もし、また同じく結縁の益を見れば、積功運勞の善、以て重とす。菩薩所修の万行等のごとし。何ぞ必ずしも、易行の道を勝とせんや。

《翻刻》

若如^ニ汝所^レ言^フ者、諸宗各抄^ニ出高祖釋文^ヲ、以勸^ニ一行^ヲ、豈可^レ有^ニ勝劣^乎。諸宗高祖、未必^ニ劣^ニ於^ニ善^ニ【三九丁オ】導。如^シ彼天台智者靈山聽衆、華嚴杜順文殊化身。一一靈相、備^ヘ于傳記。是故各守^ニ一行^ヲ人、可^レ仰^ニ其本祖遺訓。輒莫^レ執^ニ一義^ヲ疑^ニ諸門^ヲ。此名^ニ魔説^ト。諸^レ教所^レ誠也。

《訓》

もし、汝が言ふ所のごときならば、諸宗おのおの高祖の釈文を抄出して、以て一行を勧めんに、豈に勝劣あるべけんや。

諸宗の高祖、未だ必ずしも、善導よりも劣ならず。彼の天台の智者は靈山の聽衆、華嚴の杜順は文殊の化身なるがごとし。一一の靈相、伝記に備へたり。

是の故に、おのおの一行を守らん人は、その本祖の遺訓を仰ぐべし。輒たやすく一義を執して、諸門を疑ふことなかれ。これを魔説と名づく。諸教に誠むる所なり。

註

- (24) 道宣『統高僧伝』、『大正蔵』五〇、五六四頁中。
- (25) 宗密『註華嚴法界観門』、『大正蔵』四五、六八四頁下。

《翻刻》

現見、當今男子女人中、強有テリム好ニ讀ニ經修ニ觀等ノ行。其類甚多。是宿善之餘習、來果之前相也。設雖レ不ニ往ニ生ニ淨土ニ、處生死中、得不退益。如ニ彼智月夫人ノ、一發心後、於須彌山極微塵數劫、不レ墮ニ惡趣ニ、不レ生ニ惡世ニ。其身、遍ニ不可說不可說佛刹極微塵數世界ニ、亦親ニ近ニ彼世界ノ中一切如來、聽ニ聞妙法ニ受持憶念ス。亦知ル彼如來諸本事海諸大願海嚴淨佛刹海上。亦知一切衆生心性根器種類【三九丁ウ】不同、隨其所レ應ニ施設方便ニ、令レ下ニ解脫生死大苦ニ悟ニ入寂靜涅槃上。

《訓》

現に見るに、当今の男子・女人の中に、強ひて読経修観等の行を好むあり。その類、甚だ多し。是れ宿善の余習、来果の前相なり。設ひ浄土に往生せずと雖も、生死の中に処して、不退の益を得。かの、智月夫人のごときは、一たび発心の後ち、須弥山極微塵數

の劫において、惡趣に墮せず、惡世に生ぜず。その身、不可說不可說仏刹極微塵數の世界に遍じ、また、かの世界の中的一切如來に親近して、妙法を聴聞して受持・憶念す。また、かの如來の諸本事海・諸大願海・嚴淨仏刹海を知る。また、一切衆生の心性・根器、種類不同を知りて、その所応に随ひて、方便を施設して、生死の大苦を解脫し、寂靜涅槃に悟入せしむ。

註

- (26) 四〇卷『華嚴經』、『大正蔵』十、七四〇頁下〜七四二頁中(取意)。

《翻刻》

如レ此業用、充ニ滿法界ニ、無有窮盡。此等大士、其所居如淨刹。華池寶閣莊嚴奇麗。其【三五七頁上】眷属皆宿世同行大菩薩衆也。或寶柱中現無盡佛境、或重閣中間因果功德。皆是生死中大益也。若有深愛樂佛法心者、順次即有此益。若然者、設雖レ漏ニ汝勸進ニ、為レ有ニ何損乎ニ。莫レ憑ニ汝小心ニ、疑ニ無ニ大姓人ニ。大綱是足。得レ一察ニ萬ニ。此義若迄ニ委細ニ、汝謂レ破ニ念佛ニ歟。小心之至不可說不可說也。

《訓》

かくのごとくの業用、法界に充滿して窮尽あること無し。これらの大士、その所居は淨刹のごとし。華池・宝閣、莊嚴奇麗なり。その眷属は、皆宿世同行の大菩薩衆なり。或いは宝柱の中に無尽仏境を現じ、或いは重閣の中に因果の功德を

聞く。皆是れ生死の中の大益なり。

もし、深く仏法を愛敬する心あらば、順次に即ちこの益あらん。もししからば、設ひ汝が勧進に漏ると雖も、何の損、ありとかせんや。

汝が小心を憑みて「大姓の人無し」と疑ふことなかれ。

大綱、是こに足りぬ。一を得て万を察せよ。

この義、もし委細に迄ばば、汝は念仏を破すと謂はんか。小心の至り、不可説不可説なり。

《翻刻》

問曰。念佛三昧行儀、皆爲如善導所釋一切廢餘行乎。

答。此亦爲一類稱名行者、善導示一途也。【四〇丁オ】不兼修餘行者、約一類行人加行位作此説也。約一切念佛者行儀者、未必然。

《訓》

問ひて曰はく。念仏三昧の行儀、皆善導の所積のごとく、一切余行を廢すとやせんや。

答ふ。これもまた一類稱名の行者の爲に、善導、一途を示すなり。

惣じて余行を兼修せざることは、一類の行人の加行位に約して、この説を作すなり。一切の念仏者の行儀に約せば、未だ必ずしもしからず。

《翻刻》

或於念佛行中、有兼讀大乘等餘行。如觀佛三昧經第十二云。佛告阿難。此念佛三昧、若成就者、有五因緣。何等爲五。一者持戒不犯。二者不起邪見。三者不生憍慢。四者不恚不嫉。五者勇猛精進。如救頭燃。行此五事、正念諸佛微妙色身、令心不退。亦當讀大乘經典。以此功德念佛力故、疾得見無量諸佛(云云)。如此經說非一。凡於諸行、得意可爲本。莫向一文偏執而已。

《訓》

或いは、念仏行の中において、読誦大乘等の余行を兼ねるあり。

『觀佛三昧經』の第十に云ふがごとし。

仏、阿難に告げたまはく。この念仏三昧、もし成就せんには、五の因縁あり。何等をか五とする。一は持戒不犯。二は邪見を起さず。三は憍慢を生ぜず。四は不恚不嫉。五は勇猛精進して頭燃を救ふがごとし。この五事を行じて、正しく諸仏の微妙の色身を念じて、心をして退せざらしめよ。また当に大乘經典を読誦すべし。この功德念仏力を以ての故に、疾疾、無量の諸仏を見ることを得、と(云云)。

かくのごとくの経説、一に非ず。凡そ、諸行において意を得るを本とすべし。一文に向ひて偏執する事なかれのみ。

註

(27) 『觀佛三昧海經』、『大正藏』十五、六九四頁下。

《翻刻》

問曰。汝依別經論文、別立念佛義者、置而不可論之也。更莫引善導釋【四〇丁ウ】作此會釋。如先所出證文。善導宗義、永爲異。汝所存。重重所成立、更不可用之。如何。

答。汝若不許此等會釋者、令善導有偏執邪見過。夫諸論異、其理莫二。色即是空、清辨義立。空即是色、護法義存。二義鎔融、全體全攝。諸義皆如是。

《訓》

問ひて曰はく。汝、別の經論の文によりて、別に念仏の義を立てば、置きてこれを論ずべからざるなり。更に『善導の釈』を引きて、この会釈を作すことなかれ。先先、出す所の証文のごとし。

善導の宗義は、永く汝が所存に異なりとす。重重に成立する所、更にこれを用ふべからず。いかんぞ。

答ふ。汝、もし、これ等の会釈を許さずんば、善導をして「偏執邪見の過」あらしむ。

夫れ、諸論、諍を異すれども、その理、二つ莫し。

色、即ち是れ空なれば、清弁の義立す。空、即ち是れ色なれば、

護法の義存す。二義鎔融して、挙体全摂せり。

諸義、皆是くのごとし。

註

(28) 智顛『摩訶止観』、『大正蔵』四六、四二頁下〜四三頁上（『摧邪輪』卷中、三四丁オ〜ウ）。「求那跋摩遺文」、『大正蔵』五〇、三四一頁下

（『摧邪輪』卷中、三四丁ウ）。四〇卷『華嚴経』、『大正蔵』十、八四六頁下（『摧邪輪』卷中、三六丁オ）。

(29) 法蔵『五教章』、『大正蔵』四五、五〇一頁上。

《翻刻》

且如說緣生實有破。自性因上、甘露門、是初【三五七頁下】開（小乘也）。緣生故、畢竟皆空。真空中二邊不立。是爲中道。〈三論宗也〉。此中道義中有依他法相。八識三性等無邊法相、是得成立。〈法相宗也〉。此法有空假中三義。即不離一心。即空即假即中也。〈天台宗也〉。具此諸義一事法、有十玄六相德、事事無導義、是得成立。〈華嚴宗也〉。

《訓》

且く「縁生実有」と説きて、自性因を破するがときは、甘露の門、是に初めて開く（小乗なり）。

縁生の故に畢竟皆空なり。真空の中に二辺立せず。是れを中道とす（三論宗なり）。

この中道義の中に、依他の法相あり。八識・三性等の無辺の法相、是に成立することを得（法相宗なり）。

この法に、空・仮・中の三義あり。即ち、一心を離れず、即空・即仮・即中なり（天台宗なり）。

この諸義を具する事法、十玄・六相の徳・事事無碍の義あり。是に成立することを得（華嚴宗なり）。

《翻刻》

此【四一丁才】諸義遍法界^ニ而無邊^{ナリ}。即不^レ離^レ我^カ三業^ヲ、轉^シ依^メ成^ス三密門^ヲ。遍法界身業^ハ即身密也。遍法界語業^ハ即語密也。遍法界意業^ハ即意密也。俱遍^ニ法界^ニ故、身等^レ語^ニ、語等^レ意^ニ。三業皆平等^{ナリ}。三平等義^ハ、是得^ニ成^リ立^テ一真言宗也^ト。淺深絞絡成^ス一大法門海^ヲ。堅論^ニ有^リ重重淺深差別^ニ。横觀^ニ爲^ス一味平等法門^ト。

《訓》

この諸義、法界に遍じて無辺なり。即ち、我が三業を離れず。転依して「三密門」を成す。遍法界の身業は即ち身密なり。遍法界の語業は即ち語密なり。遍法界の意業は即ち意密なり。俱に法界に遍ずる故に、「身は語に等し」・「語は意に等し」。三業皆平等なり。三平等の義、是に成立することを得（真言宗なり）。

淺深絞絡して一大法門海を成す。堅に論ずれば重重淺深の差別有り。横に観ずれば一味平等の法門とす。

《翻刻》

若云^シ善導念佛義不^ス攝^セ此中^ニ一者^ハ、豈得^レ成^リ三往生正因^ヲ乎。若云^シ攝者、汝何可^レ不^レ用^ニ此會釋^ヲ乎。若云^シ與諸教終有^ニ差別者、汝謂^テ勵力立^中善導宗義^ヲ、還不^レ顧^ミ壞^ニ其宗義^ヲ也。例^シ如^ク彼執^ニ情^ノ謂^ク空有^ニ人、還壞^中空有義^ヲ。是故、若許^ニ此等會釋^ヲ者、善導宗義^ハ、爲^ス甘露妙門^ト。若二門和會者、愛^ニ【四一丁ウ】淨土門^ヲ人、何憎^ム聖道門^ヲ乎。若無^ニ此過^ハ、有^ラ諸佛出現樂、有^ラ演說正法樂、有^ラ僧衆和合樂、有^ニ同修勇進樂。大

樂此極。豈不^レ快^{カラ}乎。

《訓》

もし、「善導念仏の義、この中に摂せず」と云はば、豈に往生の正因を成すことを得んや。

もし、「撰す」と云はば、汝、何ぞこの会釈を用ゐざるべけんや。

もし、「諸教と終に差別あり」と云はば、汝、力を励まして「善導の宗義を立てん」と謂ひて、還りてその宗義を壞することを顧みざるなり。

例せば、かの情謂の、空・有を執する人、還りて空有の義を壞するがごとし。

是の故に、もし、これ等の会釈を許さば、善導の宗義、甘露の妙門とす。

もし、二門和會せば、淨土門を愛せん人、何ぞ聖道門を憎まんや。

もし、この過無くんば、諸仏出現樂あらん。演說正法樂あらん。僧衆和合樂あらん。同修勇進樂³⁰あらん。

大樂、ここに極まりぬ。豈に快からざらんや。

註

(30) 【参考】『俱舍論』「諸仏出現樂・演說正法樂・僧衆和合樂・同修勇進樂」、『大正藏』二九、二頁下。

(よねざわ みえこ) 嘱託研究員 淨土宗総合研究所嘱託研究員